

日本国内の多くの学校が、通常授業に戻りつつある。このまま元の状態の学校に戻りたいというのが、学校関係者の願いであろう。だが、残念ながら学校はもう元には戻らない。いや、元に戻してはいけない。

臨時休業中にオンライン授業の導入が進められ、その拡大が今後の課題となっているが、学校が通常に戻れば、もうオンライン授業に取り組む必要はないのか。教員は、以前と同じ対面一斉授業をしていればよいのか。学力向上のかけ声の下、少しでもアクティブ・ラーニングを採り入れながら、相変わらずの知識注入重視の授業を行ってよいのか。

そもそも、オンライン教育のみで知識を得ることが可能な時代における学校の意義とは何か。学校関係者の多くが、休業中に先に挙げたような疑問を感じていたはずである。だが、目に見える学力向上を求める声は、コロナ禍の後も変わらない。異例の長期休業という事態も、毎日の多忙な業務の中で、いずれ忘れられていくのかもしれない。学校をめぐる子ども、保護者、教職員、一般社会の意識は、確実に変わりつつある。学校関係者が、これから考えていくべきことは、長期休業による学習の遅れを取り戻すことだけではない。

休業措置が続いたことで、学校との間に距離が置かれ、大人も子どもも学校の存在理由や学校教育の役割について熟考せざるを得なくなった。

政府の「GIGAスクール構想」によって、オンライン授業が拡大すれば、知識の伝達は、それで賄ってしまうかもしれない。その時、学校のメリットは、仲間と直接的に対話、協働できることになるであろう。まさに、「主体的・対話的で深い学び」が、これからの学校の存在理由そのものとなる。対話を通して、学校を学ぶ場にできるかどうかが大切になってくる。

人と人とが直に向き合い、対話する機会が制限される今般のコロナ禍において、学校教育は学ぶことの意味や進歩、発展することの意味を改めて問い直す必要があるのかもしれない。

経済産業省が主導する「EdTech」（エドテック）など教育のICT（情報通信技術）化では、ICTを授業などで使用することで、子ども一人一人に応じた学習の「個別最適化」が実現すると主張されている。

一斉授業の中で、子どもが1人1台のコンピュータを使えば、それが個別最適化なのではなく、現在の授業そのものを変える必要がある。個別最適化の授業のイメージは、「目標は一緒だけれど、それぞれの子どもがしていることは違う」というものである。そのため、授業では最後に相互評価などを行い、褒め合ったり認め合ったりする場面をつくるなど、必ず級友と交流する必要がある。

とりあえず、学校としては、新型コロナウイルス感染症拡大による再度の学校休業の可能性、オンライン授業の拡大などを想定して、その時に学校における授業はどうあるべきかを考える必要がある。オンライン授業や個別最適化の教育が進みつつあるのに、学校の授業が従来通りでは、学校の意味が薄れてしまう。

コロナ禍は、GIGAスクールの急速な推進という思わぬ事態を学校にもたらすことになったが、休業の長期化により、子どもたちがいなくなった学校の中で、教育のICT化とは何かを教員が見つけ直すきっかけにもなったはずである。